

平成30年12月18日 田中

～縁起の宝船で福がくる！来年も猪(ちょ～)楽しい一年になりますように！～

「隅田川七福神宝舟」づくりで大忙し！

都内でも有数の七福神めぐりとして知られ、新年には多くの参拝客で賑わう「隅田川七福神めぐり」。年の瀬を迎え、この七福神を祀る墨田区内の各寺社などでは、御分体（ごぶんたい＝御神体の分身で高さ5cmほどの黒い陶器製のもの）を乗せる「隅田川七福神宝舟」づくりが始まった。

「隅田川七福神めぐり」の期間中、七福神を祀っている6寺社などで授与されるものが「隅田川七福神宝舟」。隅田川七福神めぐりでは、各寺社などでそれぞれの福神の御分体（各500円）を頒布しており、それらすべてを各寺社などで求め、宝舟（1艘1,500円）に乗せて玄関や神棚、仏壇などに飾ると「福がくる」と古くから言い伝えられている。そのため「縁起の宝舟」として、御分体と一緒に毎年購入する参拝者も多い。この「宝舟」は、かつて隅田川を往来していた舟を模したもので、純白の陶製品で、上品な作りとなっている。大きさは、長さ約20cm、幅約8cm、高さ3cmほど。舟の中央には、新年の雑煮箸として用いられる「柳箸（やなぎばし）」で作られた高さ約15cmの帆柱が立てられ、そこに朱色で「寶」と押印された祝儀を包む奉書でできた帆が「そっくい（米粒をつぶした糊）」で貼り付けられている。さらに帆柱の頂点からは、船首と船尾に向かって風糸をウコンで黄色く染めた帆網が張られており、正月にちなんだおめでたい品々が使われている。

今年も隅田川七福神のうち、「寿老神」を祀る「白鬚神社（宮司：今井 達（いまい いたる））」で、『隅田川七福神宝舟』づくりが始まった。緋色（ひいろ）の袴を身に着けた清楚な雰囲気漂う巫女が製作にあたっている。「宝舟」を作る一連の工程は、すべて手作業で行われており、張り詰めた空気の中、巫女は次々と「宝舟」を仕上げている。

同神社では、31日の夜に、作り終えた「宝舟」と「御分体」を神前に供え、お祓いをする「清祓式（きよはらいしき）」を行う。元旦の午前零時から、各寺社などで頒布。



《写真》①～⑥『隅田川七福神宝舟』づくりの様子

《問合せ》白鬚神社 今井 達・宮司 Tel 3 6 1 1 - 2 7 5 0

☆ お問合せは、午後5時までをお願いします。

（広報広聴担当 Tel 5 6 0 8 - 6 2 2 0）

<隅田川七福神めぐりについて>

「隅田川七福神めぐり」は、元旦から7日までの間に、福德の神を祀る寺社などをめぐり、開運を祈る行事。江戸時代後期、向島百花園の創始者である佐原 鞠塙（きくう）と文人仲間が、鞠塙所有の「福祿寿尊」を使って七福遊びができないかという話になったのが始まり。鞠塙たちは、多聞寺の「毘沙門天」、長命寺の「弁財天」、弘福寺の「布袋尊」、三囲神社の「恵比寿神・大国神」は揃ったが、寿老人だけが見つからなかった。そこで、向島百花園近くの白鬚神社で、「白い鬚であれば老人の神様であろう」と考え、白鬚神社の神様を「寿老神」と見立てて「隅田川七福神」が完成したといわれている。200年以上経過した現在も『隅田川七福神めぐり』は、お正月の恒例行事として多くの人に親しまれており、下町情緒あふれる区民の生活文化行事として、平成15年10月に、墨田区登録無形民俗文化財に登録された。